

はしがき

2013年9月15日現在のわが国の高齢化率は25%と、過去最高を記録した。世界190有余の国々の中でもトップ水準の高さである。そのうえ、これからも高齢化率は上昇を続け、2050年頃には40%の高率になると見込まれている。高齢化の進行が急速で、高齢化率の水準が高いばかりでなく、総人口が減少する人口減少社会の中での高齢化の進行である点に、わが国の高齢化のもうひとつの特徴がある。

かつての高度経済成長期には、経済や生活水準の面で西欧諸国に「追いつき追い越せ」がスローガンとなったが、人口高齢化の面ではすでに西欧諸国の水準を追い抜き、諸外国が経験したことのない道を歩み始めている。しかし、その道が平坦でないことは、昨今の年金制度や高齢者医療制度をめぐる議論や混乱といった高齢者に対する社会保障制度の運営をみるだけでも理解されるであろう。

高齢者介護の面では、わが国では1990年代後半に介護保険制度が創設され、2000年4月から実施されている。施行後10年目の2010年度では、要支援・要介護者数約500万人、毎月の介護サービス利用者数約410万人、居宅サービス事業所数約10万箇所、年間の介護費用額約8兆円という規模に発展してきた。他方、国や地方自治体の財政負担と保険料負担の増大、認知症高齢者への対応、介護事業の適正化、介護人材確保難等の課題が生じている。

欧米先進国でも高齢化の進行に伴う介護問題は、大きな政策課題となっている。1990年代からスウェーデンにおけるエーデル改革、イギリスにおけるコミュニティケア改革、ドイツにおける介護保険制度の創設、フランスにおける個人自律化手当の導入など、各国で特徴ある取り組みが行われている。東アジアでも、韓国では、ドイツ、日本に続き総合的な介護保険制度が創設され、2008年7月から保険給付が実施されている。

本書は、イギリス、フランス、ドイツ、スウェーデン、アメリカ、中国、韓

国、台湾、シンガポール、日本の10カ国を取り上げ、各国の高齢化の現状、介護施策の歴史、介護保障システムの概要、その課題と今後の方向性について、それぞれの国の社会保障政策に詳しい学者・研究者が解説している。紙数の制約はあるが、最新のデータや研究に基づき、具体的に説明している。また、総論的な解説として序章で介護保障システムを分析・比較する際の基本的な視点を、補章では日本・ドイツ・韓国の介護保険制度の比較考察を編者が執筆している。

各国の介護保障システムを比較すると、年金制度や医療保険制度よりも各国で多様な姿をみることができる。家族形態や従来の介護への対応のあり方、社会保障制度の歴史、経済社会の状況等、さまざまな要因が重なり合って、具体的な制度面では各国間で異なる点が多いことは、大変興味深い。ただし、長寿化、高齢化の進行の中で、要介護状態になっても安心して生活できるシステムをつくるという目的は共通している。財源調達方法から、税を財源とする社会扶助方式と、保険料を財源とする社会保険方式に、システムを大別することもできる。

本書では、他の類書とは異なり、とくに東アジア諸国を多く取り上げている。これまで経済発展に力を注いできた東アジア諸国でも、21世紀は欧米諸国以上に高齢化が進み、介護問題への対応が大きな課題となってくる。今、それに対する取り組みが始まりつつあり、今後の展開が注目される。

本書により、読者の方々が世界各国の介護保障システムに関する知識を深め、介護問題や介護保険についての新しい発見や取り組みにつながることになれば、執筆者一同望外の喜びである。最後に、本書の出版の機会を与えてくれた(株)法律文化社及び編集の労をとっていただいた小西英央氏に心より感謝申し上げます。

2014年3月（第2版に際して）

編者 増田雅暢